

## 20 日中文化人の書簡交流にみる周作人の芸術と思想

顧 偉 良

### はじめに

明治以降、日清戦争（1894）をきっかけとして、日本では中国蔑視の風潮が高まった。その中で1920年9月創刊の『支那學』（京都大学支那学会）は、20世紀の日中文化交流において画期的な出来事であった。青木正兒は「発刊の辞」の中で、「週末學術討究の自由なる、百家競ひ起り、初学並び進む、人に高下無く、学に輕重なし、嗚呼亦盛なりと謂ふ可し。（略）人の支那学を顧みざる、当世より甚しきは莫し」と記している。日本の中国学の誕生は、1910年代の中国新文化運動にも新風を吹き込んだ。それからの数十年間、日本の中国学の研究者と周作人（1885-1967）との間に様々な交流が行われたが、その実態はまだほとんど知られていない。

2015年3月末、周作人宛ての日本知識人の1400通の書簡が発見されたことは、日本の新聞メディアで大きく報道された<sup>1</sup>。20世紀の日中文化人の交流においてこのような規模を超えるものはまだないようである。「世紀の大発見」と考えられる。書簡の送り主は360余名で、日本の著名な作家、詩人、芸術家、評論家、中国文学の研究者等を含む。

周吉宜氏（周作人の孫、元中国現代文学館副館長）は、メールで「日本の友人から送られたこれらの書簡は、祖父が生涯、大切に保管したため、社会の激動を経たにもかかわらず、保存されたのは誠に有難いことです。今後これらの書簡は適切な方法で社会に公表し、その役割を果たすことができれば、先人の願いにかない、後生の責任でもあります」と述べた。

周作人親族の代理人として、書簡整理に携わった筆者は、書簡人名リストを作り、勤務校弘前学院大学のホームページに掲載している<sup>2</sup>。また朝日新聞などに寄稿した<sup>3</sup>。これらの書簡は4種類に分けられる。①白樺派を中心とした文人、芸術家、「新しき村」のメンバーとの交流、②日本を代表する中国学の研究者との交流、

1 2015年3月末、NHK、共同通信、朝日・読売・毎日新聞、聖教新聞、東奥日報、陸奥新報などが、これらの書簡の発見を報道した。

2 弘前学院大学HP（<http://www.hirogaku-u.ac.jp>）内、大学院文学研究科教員紹介。

3 寄稿「周作人、隠れた人間像に光」『朝日新聞』2015年4月2日全国版・文化欄。

- ③日本軍占領下の北京大学文学院院长時代に行った日本の文士、学者との交流、  
④1950年代以降の交流、である。

その他に、周作人親族の手元に保管されている約2万通の中国人からの周作人宛書簡の中から、さらに日本人からの周宛書簡や葉書が数十通発見されている。日中文化交渉史からみて、これらの書簡は極めて高い歴史的価値がある。

周作人は1901年から1906年まで南京の水師学堂(海軍学校)で5年間学んでから、1905年の官費留学試験に合格、当初は土木建築を学ぶ派遣留学生として、1906年に留学の途についた。東京での下宿生活は兄・魯迅と同居であった。下宿先は、本郷区湯島2丁目の伏見館、本郷区東竹町の中越会館、本郷西片町の「伍舍」(10番地呂字7号、かつては漱石の下宿先)の3か所に移り住んだ。魯迅が帰国後、周作人は麻布森元町(赤羽橋近く)に引っ越した。はじめは法政大学予科に入学、後に立教大学に転校、1911年帰国した。

周作人は当時の留學生活について、「東京にいた数年間の留學生活は、頗る愉快だった。アパートの主人や警察から一度も蔑視されたことなく、または大きな事件と出会ったこともない。魯迅が映画で見た日露戦争で中国人スパイが殺されたことのようなショックも受けなかった。最初の頃、外部との交渉はすべて魯迅がやってくれたので、何もかも平安無事だった。それが日本生活に良い印象を残してくれたわけだ」<sup>4</sup>と振り返っている。

留學時代の周作人は日本文化に高い関心を持ち、特に日本の宗教や日本人の情緒、生活習俗に注目していた。民俗学では柳田国男、南方熊楠に早くも関心を抱き、民芸運動の推進者・柳宗悦にも興味があり、『スバル』、『三田文学』、『新思潮』、『白樺』などを読み漁った。日本人の「根本精神は巫女に由来しており、表面上は濃厚な中国文化や仏教文化を受け、様々な特色が現れているので」、日本人の国民性を理解するには「単なる文学芸術に限らず、宗教理解も必要だ」<sup>5</sup>と考えていた。

帰国後の周作人は、1917年より1945年まで北京大学教授を務めた。彼の生涯の著述活動は、1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に分けられる。彼の評論は中国の文学、宗教、民俗、思想、教育、児童文学、婦人問題、ギリシア文明、日本文学などにわたり、幅広い。散文においては古代ギリシアのテオクリトスの影響を受け、諷刺文学においてはギリシアのルキアノスとエウリピデス、フランスのラブレールなどを受容している。日本古典の翻訳は古事記、平家物語、枕

4 周作人『知堂回想録』上、安徽教育出版社、2008年、131頁。

5 同上、123頁。

草子、狂言などがあり、近代文学の翻訳は森鷗外、国木田独步、菊池寛、与謝野晶子、石川啄木、千家元麿、武者小路実篤などの作品がある。雑誌『新青年』でE・カーペンター（Edward Carpenter）、H・エリス（Havelock Ellis）などを取り上げて論じている。ギリシア文明に啓示を受けた周作人は、「独立の精神」と「学問の自由」を重んじ、新文化運動を推進していた。

本稿は、20世紀に交わされた周作人と日本人との往復書簡を通して、周作人の芸術思想を検討する。具体的には、（1）中国文学の研究者青木正児と周兄弟との書簡交流、（2）周作人と武者小路実篤・「新しき村」との交流、（3）中国文学研究者一戸務による周作人評価、（4）晩年の周作人と谷崎潤一郎との交流、（5）周作人旧居の訪問、という五つの側面から検証する。

## 1. 青木正児の周豫才（魯迅）、周作人宛書簡

20世紀初頭の中国で最も注目すべきは、北京大学の若手教授らによる新文化運動の提唱であった。この運動の推進者の一人である周作人は、「人の文学」（1918）、「日本近三十年来文学之発達」（1918）、「新文学の要求」（1920）などの評論をもって新鋭文芸評論家として頭角を表わした。この新文化運動は、日本の中国学の研究者に注目されていた。のち中国文学の研究大家になる青木正児もその一人であった。彼の周兄弟宛の書簡の中で語られたことは印象的で、周作人親族の許可を得て、ここで部分的に公開する。

まず、1通目（大正9年11月20日付）：

出し抜けに御免なさい。私の頭の中に以前から魯迅さんと周作人さんとお二人の名前が離れ離れに——併し共に日本文学に精通してみられると云ふ一点で連続を保ち乍ら——存在してゐたのです。今其れが離る可からざる骨肉的結合を私に教へて下さった方が、何と云ふ驚きでせう。それは胡様の御手紙でした。そして貴方がた御兄弟が私共の時代後れの雑誌に対して幾分興味を持つてゐて下さることを承つて嬉しく思ひました。管らぬ雑誌ですが、一号から三号まで取揃へ、胡様のお宅宛にして御兩人へお送りするやう、此の手紙と同時に書林へ端書を出して置きますから到着の上はお納め下さいませ。（略）

魯迅さん、貴方の「狂人日記」以下の諸作を私は大きな期待を以て拝見してゐます。近き将来に於て新らしい創作をして真に意義あるものと為さしむるの業は貴方のお手によって成功せらる可きを信じて疑ひません。創作の先

覚者として私は貴方に心から尊敬を払つてゐるのです。私は「狂人日記」を我国に紹介したいと思つてゐますが、私の支那語に対する語学力の不足が私をして躊躇せしめてゐます。(略)近頃の白話文でも議論文は古文風な所が多い為に十分了解出来ませんが、創作には純粹の白話が用ひられてゐる為に愧し乍ら一言一句了解悉くして訳することが私に企及し得られぬのです。私は是非勉強して貴方がたの作物を翻訳するやうになりたいと思ひます。そして貴方の事業を日本の文壇に紹介することを得たいと思ひます。

周作人様、貴方の新村研究は面白いございました。私は又最も新しい大陸文学の紹介者として貴方を尊敬してゐます。又貴方の明治以来の日本文学界の概要を御国に紹介して下さったことを感謝します。私は今支那文学の研究に没頭してゐます。(略)近頃では谷崎や芥川のことを面白いと思ひます。有嶋武郎氏は深みのある芸術家です。(略)貴方のお好きな武者小路君も「純」なる芸術家として私も好です。私の従兄某(彫刻家)は彼と親友で常に彼を推賞してゐました。

封筒には「周 豫才作人御兩人様 参る」と書いてある。横にこの手紙を転送した胡適が、「他送給你們的支那学一至三，還沒有到。適」(彼が貴方たちに贈った一号～三号の『支那学』はまだ届いていない)と書き添えている。胡適は北京大学文科学長、教授で新文化運動の主要メンバーの一人である。青木は魯迅を「創作の先覚者」として期待し、周作人を明治文学の紹介者、「新しき村」の研究者として尊敬していたことが上記の引用でわかる。

2通目(大正9年12月27日付)：

御兄弟は揃ひの結構な日本文の御手紙を下さいまして有難う御座いました。私も支那文で書いて見やうかと思ひました。(略)私は先生にお願いがあるのです。それは十二月十三日の「晨报」に先生們的發起せられた文学研究会なるものの宣言を見出しました。私は心から其の出現を歓迎します。私も其の会員になることが出来ますでせうか？編輯叢書の利益は頒って戴く事が出来ると思ひます。私は此の会に入会することによって現代支那文界の新運動を知るに多大な便利を与へられ得ると思ひます。どうか私の為に紹介の勞を取って下さい、(略)日本では今年春頃、文部大臣から訓示が出て、一切の公文書を白話文にしろと云ふことになりました。近頃諸学校でぼつ／＼改められて来ました。大変結構な事と思ひます。届書一つ出すにも「小生……

此段及御届候也」と云つたやうな幕府時代の遺物が吾々の頭に往来してゐるのは、丁髷が散髪の上に載つかつてゐるやうな変な恰好なのです。貴方がたも辮髪（べんぱつ）の痕跡は成可く早く去つてしまはれては如何ですか。（略）

先生！ 日本近時の文学も漱石以来大きい物が出ませんね。それは作家の修養が足りないからです。口嘴の黄いうちに、すぐもう大家になってしまうからです。漱石は実に偉らかつたです。其の作は今から見れば多少時代の過ぎたものでせうけれど、あの人は当時英文学者としても日本の第一人者であつたのです。その蘊蓄（うんそく）を傾倒して創作界に乗り出したのですから向ふ所敵無しです。それにあの人は漢学の深い趣味を持つてゐられ、漢詩なども作りました。支那風の画も実に気韻の高いものを描きました。漱石門下の鈴木三重吉だの森田草平だの連も漱石先生程行くことは駄目（だめ）でせう。芥川龍之介と谷崎潤一郎とは才物です。恐ろしい程の才筆（さいひつ）を持てゐますが、谷崎などもあまりもてた為に近來駄作をやつて困ります。どうか先生方も自重して大きなものを見せて下さい、急ぐ事はありません。お国は大陸です、大きいです、大きいものがきつと出ると私はそれを楽しんでゐます。日本のやうなこせへした島国は駄目（だめ）です、深いもの、大きいものは望みません。（略）一生を支那文学研究に捧げるつもりです。古い事でも新しい事でも何でも支那の事が知りたいのです。宜しく御指導を仰ぎます。

この手紙は言文一致（白話文）を含む文学の将来を論じ、封建時代遺物の辮髪と丁髷を引き合いに、異文化の比較を行っている。中国文学の新しい動きに啓発された青木からの書簡は周兄弟にとっても新しい刺激になっただろう。

周兄弟の青木宛書簡（魯迅1通、周作人8通）は、近年刊行の『青木正兒家蔵中国近代名人尺牘』（大象出版社、2011年）に収録されている。周作人の青木宛書簡の1通目と2通目は1920年、3通と4通目は1940年代、他の4通は1958年、1960年代に出されたものである。青木からの書簡で言及された「御兄弟は揃ひの結構な日本文の御手紙」を見てみよう。まず、周作人からの青木宛書簡（1920年12月15日付）：

（略）「支那学」を御送り下されてありがたう。先日胡適之君から第四号を受け取りました。十分の敬意と興味とをもつて拝見して居ります。支那学は本場の支那よりも貴国の方はより學術的に研究され、また多くの有益な論文や書物が発表されてゐる事は予ねて知つて居りますが、あなた方の雑誌を見

ますと支那現代の思想界の傾向にも注意を払つてゐる事は殊更に私達の興味を引きました。過去の文化ばかりでなく、現在の支那の人間の、微弱ながら、光明へとの内面的な努力をも認めて日本に紹介してくれた事を感謝します。日本と支那との様な歴史上からして色々な深き関係をもつてゐる国は互いに理解し合はなければ成らない筈ですが、支那にはまだ日本の芸術はちつとも知られて居ないのは実に残念な事と思ひます。私は今少しでも日本現代作家の作品を訳して支那に紹介したく思つて居りますが日本語の知識は足りませんので心細く思ひます。また美術の事も分らないのも随分残念に思ひます。都合がよかつたら此からもう二三年位日本で勉強したいと思つて居ります。<sup>6</sup>

それから、同年の周樹人（魯迅）の青木宛書簡（11月14日付。12月14日の誤記ではないか。要確認）：

拝啓御手紙拝見致シマシタ、支那学モツヅイテ到着シマシタ、甚ダ感謝シマス。

ワタクシハ先日胡適君ノ処ノ支那学デ、アナタノ書イタ支那学革命ニ対スル論文ヲ読ミマシタ。同情ト希望ヲ以ツテ然モ公平ナル評論ヲ衷心ヨリ感謝シマス。

ワタクシノ書イタ小説ハ幼稚極ナモノデス。只ダ本国ニ冬ノ様デ歌モ花モナイコトヲ悲シデ寂寞ヲ破ルツモリデ書イタモノデス。日本ノ読書界ニ見セル生命ト価値トヲ持つて居ナイモノダロト思ヒマス。コレカラ書ク又ハ書クツモリデスガ前途ハ暗澹デス。コンナ環境デスカラ、モット諷刺ト咀呪ニ陥ルカモ知りマセン。

支那ニ於ケル文学ト芸術界ハ実ニ寂寞ノ感ニ堪ヘマセン。創作ノ新芽ハ少シク出テ来タ様デスケレド生長スルカドーカサツパリ解リマセン。「新青年」モ近頃随分社会問題ニカタムイテ、文学方面ノモノハ少ナク成リマシタ。支那ノ白話ヲ研究スルニハ今ニ於イテ実ニ困難ナコトデアルト思ヒマス。唱道シタバカリデスカラ、一定シタ規則ナク各人銘々勝手ナ文句と言葉トヲ以ツテ書イテ居リマス。錢玄同君等ハ早ク字引ヲ編纂スルコトヲ唱道シテ居ルケレドモ、未着手シマセン。若シソレガ出来タラ随分便利ニナルダロト思

6 張小鋼編注『青木正兒家藏中国近代名人尺牘』中国：大象出版社、2011年、79-81頁。以下、同書からの引用の際は、旧漢字は新漢字に改めるとともに、原文に適宜、句読点を追加した。強調は引用者。周作人の書簡は「新村北京支部」と記される便箋を使っている。



上記の書簡から中国の思想界に対する兄弟二人の認識が異なっていることがわかる。周作人は学問の見地から日本の『支那学』誌に共鳴を示し、その意義についての見解を述べた。「過去の文化ばかりでなく、現在の支那の人間の、微弱ながら、光明へとの内面的な努力」という言葉は、思想界の変化に注目し、新文化運動の精神を的確に把握し、生活、感情、思想の相互関連を含む学問体系をもっていることを示す。

一方、魯迅は書簡の中で創作などにも触れているが、周作人のように思想界の変化に関心を示さず、「読書界」を悲観的に見て、自身の創作をも揶揄している。彼は「只日本国ニ冬ノ様デ歌モ花モナイ」と書き、暗澹たる創作の前途を嘆き、孤独者の心境を「寂寞を破ル」という言葉で表現している。このように、同時代の中国思想界に示された魯迅と周作人の違う反応は、新文化運動の時点で既に違う道を歩み始めていることを示す。

『青木正兒全集』第十巻の「年譜」に、「(大正)九年(三十四歳)九月小島祐馬・本田成之諸氏と「支那學」を創刊、「胡適を中心に渦いてゐる文學革命」を寄稿。のち胡適と相知る。此頃亦周樹人・周作人とも相知る」<sup>8</sup>とある。『支那学』は、中国文学、東洋史学の碩学(狩野直喜、桑原鷺蔵、内藤湖南等)を中心に始まる研究誌であり、「実証主義」を受け継ぐ京都学派の誕生を意味する。1947年8月まで400余の論文が掲載され、堅実な中国学の成果を世に送り続けた。戦時下でも中断することがなかった。青木はいわば第2世代の中国学の研究者である。

『支那学』の創刊号、2号、3号に掲載された青木のこの論文は、「文学革命」(白話文学)をめぐって、胡適の「文学改良芻議」、陳独秀の「文学革命論」、劉半農、沈尹默らの白話文新詩を詳細に論じている。これについて、胡適は青木宛の書簡(1920年11月11日付)で、「先生は中国の文学革命運動について論じ、取材が適切で、見解も公平ですが、私個人を褒めすぎたところがある」と書いている<sup>9</sup>。内容の充実した『支那学』は中国の若い文化人を驚かせただろう。同じ書簡に、胡は「先生は我々に寄せた、「中国の長所をもっと発展させ、足りないところは西洋のすぐれた文学を持ってきて徐々に補足すれば、立派な新しい文学が作れます」と

7 『青木正兒家蔵中国近代名人尺牘』70-73頁。強調は引用者。

8 『青木正兒全集』第10巻、春秋社、1984年。

9 「胡適致青木正兒 之二」、『青木正兒家蔵中国近代名人尺牘』19頁。胡からの青木宛書簡は合計9通(1920年9月25日～1921年5月19日)。

いう希望は正に我々一同の願いです。しかし、我々の力は弱すぎて、恐らく破壊をする処が多く、建設する所が足りないでしょう」<sup>10</sup>と書いている。胡適は中国古典小説の研究家として<sup>11</sup>、このような洞察力と想像力を働かせることができたのであろう。「破壊」と「建設」こそが、新文化運動と政治化した「五四運動」との分岐を作った要因だと思われる<sup>12</sup>。新文化運動に頭角を現した周兄弟に宛てた青木の書簡は中国思想史から見ても大きな意義がある。

## 2. 新しき村、武者小路実篤との交流

1918年11月、武者小路実篤は、農業共同集落「新しき村」を宮崎県児湯郡木城村に設立した。翌年7月、周作人は早くもこの地を訪れた。実篤夫妻の借家の2階に4日間滞在した。この訪問については、武者小路房子の「周さん」<sup>13</sup>と実篤の「周作人さんとの友情、想ひ出など」<sup>14</sup>に詳しい。その後、周作人は「新しき村」の水路建設のために寄付をしている。実篤は周宛てに「君に何度も手紙をかきたく思ってゐました。昨日君から10円寄付が来てうれしく思ひました。その内に君の村への変らざる愛を感じることが出来、なほうれしく思ひました。(略)今度村で「新しき村通信」にかきましたやうな本を出すことにしたくその時支那の文学哲学等を日本訳したものを出したく殊に古い詩の日本訳を出したく思つてゐます。君に訳して戴けると理想的と思ひます。詩に限りませんが日本人によませたいものがありましたら訳して戴くなり、評論風のもののかいて戴くなりしたく思ひます」(2月7日付書簡より一部引用)と書き、感謝の気持ちと文学上の信頼を見せている。

周作人が「新しき村」に共鳴を覚えたのは、1918年5月に東京堂書店から購入した雑誌『新しき村』がきっかけであった。それと同時に、実篤と周兄弟には交流があった。まず、実篤の『ある青年の夢』を魯迅が中国語訳して、『新青年』誌に4回連載したのち、周作人は感想文「武者小路実篤の『ある青年の夢』を読む」を『新青年』(第4巻第5号、1918年5月)に掲載した。その後、実篤からの公開書

10 同上、18頁。

11 胡適には『紅樓夢』『水滸伝』『三国演義』など十数種類の古典小説に関する実証的研究があり、禪宗研究、水経注研究者でもある。

12 唐徳剛訳注『胡適口述自伝』華東師範大学出版社、1997年、第九章「“五四運動”——一場不幸的政治干渉」。

13 『新しき村』1919年8月号。

14 武者小路実篤「周作人さんとの友情、想ひ出など」、方紀生編『周作人先生のこと』光風館、1944年(初版)；大空社、1995年(復刻)。



簡「与支那未知的友人」（支那の未知の友人へ）（1919年12月9日付）を周作人が中国語訳して『新青年』（第7巻第3号、1920年2月）に掲載している<sup>15</sup>。実篤の原文が見つからないため、中国語からの関口弥重吉の和訳をここで部分的に引用する。

実を云うと私は今世界の中で一番難解な国は支那だと思っています。ほかの独立国はみな目覚めて「人類的」になろうとしています。国民性の謎もその一部分はわかってきました。しかし支那という謎はまだ少しも解けていません。日本もまだ完全に目覚めていないけれども、支那より幾分目覚めており、謎も解明されようとしています。（略）支那が壮んになるときがまたやってきていると思います。諸君が決心して立ち上り、その精神が発揮されるときが支那の精神と文明世界とが生れかわる時だろうと思います。人類はその時に大きな期待を抱いています。諸君はその期待に背くことはないでしょう。（略）

私は正直な人を、真心を求めている人を、忍耐強く、意志の強い、思いやりが深い、そして進んで人類の為に働こうとする人を求めています。支那には必ずこのような人がいるにちがひありません。その人はきっと目覚めるでしょう。（略）<sup>16</sup>

以上のように武者小路実篤は『新青年』誌の同人を念頭にこの公開書簡を書き、中国の若い人を激励していたのである。それをいち早く中国語訳した周作人は、きっと感銘を受けただろう。

周作人日記には、1918年5月より1920年にかけて、「新しき村」に関する記述が頻繁に出ている。1919年4月15日、周作人は妻子と共に日本へ行き、日向で「新しき村」を見学。5月、北京で五・四運動が起こり、一人で北京に戻る。7月、再び日本へ、新しき村を訪れる。「新しき村」の北京支部の設立について東京で実篤と相談。帰国後の周作人は、1920年2月、北京八道湾の自宅で「新村北京支部」を設立し、問い合わせの場所と時間、日向への実地考察の紹介、旅行手続きなどはすべて周作人が執り行う、という旨の「新村北京支部啓事」を『新青年』誌に掲載している<sup>17</sup>。また、「新しき村」の理想を精力的に紹介していた。「日本

15 武者小路実篤「与支那未知的友人」、『周作人散文全集』第2巻、広西師範大学出版社、2009年所収。

16 関口弥重吉「解題」、『武者小路実篤全集』第2巻、小学館、1988年、683-684頁。

17 『新青年』第7巻第4号、1920年3月、『周作人散文全集』第2巻所収。

の「新しき村」(1919年3月)、「日本の「新しき村」訪問記」(1919年10月)、「「新しき村」の精神」(1919年11月)、「「新しき村」の解説」(1920年1月)、「「新しき村」の理想と実践」(1920年6月)、「「新しき村」の討論」(1920年12月)などといった評論を『新青年』誌に発表している。

実篤も「周作人さんとの友情、思ひ出など」の中で、「長い間新しき村の北京支部を周さんにやつてもらひ、北京へゆく人は周さんに紹介し、又中国の人で新しき村のことを知りたい人は皆周さんに紹介した。時には随分御迷惑を与へたかも知れない」(1944年1月)<sup>18</sup>と書き、また「周作人と私」の中で「周作人は人間として立派な人であることは誰も認めてゐると思ふ。又詩人として学者として周作人は尊重すべき人であり、周作人のかく随筆は日本語に訳されてゐるが、それを読んで立派なものであり、面白いものであり、頭のいいことがわかる。」<sup>19</sup>と書くなど、深い尊敬の念を抱いていることがわかる。

周作人日記によれば、当時、北京大学図書館司書の毛沢東も「新しき村」北京支部を訪ねた。「新しき村」の運動は、新しい人間形成を目指すもので、実篤の言葉「真、愛、美」が示すように人間同士の「絆」を深めるためである。彼らの唱える生命の讃歌、また人間精神への肯定は、「新しき村」の運動の原動力だと言っている。中国人に連帯感を持たせて、「新しき村」の理想を実現させる人の現れを期待していた実篤は、周作人と出会ったのである。

二人の交流は、周作人が亡くなるその前年(1966年)まで続いていた。実篤は1961年12月27日付の周作人宛の書簡に、「御手紙なつかしく拝見致しました。あなたのことは大阪の山本樽信君からうかがい、御元気の御様子を知り、喜んでいました。私の『真理先生』を訳する事元より承知致します。鮑氏にどうぞよろしく。私は無事にくらしていますが、少し老人になり足が少し弱くなりました。しかし御かげで毎日嬉しく仕事しております。お互に生きている間は仕事をしたいものです」<sup>20</sup>と書いた。この手紙は香港在住の商人鮑耀明を通じて周作人に送られた。

「大阪の山本樽信」とは、今回発見された周作人宛書簡の中で、「新しき村」の村員としてもっとも多くの手紙や葉書を送った人である。ここで山本樽信からの葉書(1920年8月11日付)を紹介する。「新聞紙上にて兄等先進家達を中心として最も有意義な運動をなされて居る由承り喜んでゐます。又村を支部にもお造りに

18 武者小路実篤「周作人さんとの友情、思ひ出」、方紀生編『周作人先生のこと』5頁。

19 「周作人と私」、『周作人先生のこと』13頁。

20 『周作人と鮑耀明通信集1960-1966』河南大学出版社、2004年。

なるとの事非常な希望を以て待つてゐます。いくら不平を抱いても地球以外に脱出することの出来ない以上もつとお互に楽しく生活する事の出来るやう努力したいと思つてゐます」とある。

当時、日本各地の「新しき村」支部から年賀状や葉書を周作人に送っていた。宛先は「周作人兄」で、村員の名前を傘状に記し、心のこもった文章を連ねている。そこから1920年代、海を挟んだ日中の人々が友愛の心を持って社会改良に励みあった気持ちを見ることができる。各支部からの数多くの書簡の公表が期待される。

現在、調布市仙川の武者小路実篤記念館では、実篤と周作人、錢稻孫らの北京での写真（1943年4月に中国を訪れた実篤、谷川徹三らと）、周作人の実篤宛て書簡3通（1956年10月、1965年12月、1966年5月）、周作人自筆原稿1点「過ぎ去つた生命」が所蔵されている。また、自筆原稿1点「新村的説明及会則」の寄託を受けている。ちなみに、周作人親族所蔵の実篤の周作人宛書簡は4通ある。ここで、1943年4月の中国訪問後、実篤は日本から周作人に手紙を書いている。

御手紙唯今戴きました。（略）貴兄の事をなつかしく思つておりました時だけになほ嬉しく拜見しました。北京ではゆつくり御話する閑がありませんでしたが御逢い出来、その上御愛蔵の磚を戴き誠にありがたう御ざいました。去年のくれに京都で磚の硯を一つ手に入れて喜んでおりました処だつたので一層よろこびました。それ以上折角御集めになつてゐられるものから一つ御送り下さる御厚意に感謝いたします。その御礼としてどうかと思ひましたが、私も愛蔵してゐましたものを一つ差し上げたくいろいろ考へた結果、四暢園を選びました。御氣に入つて嬉しく思ひました。平和になつてゆつくり御逢ひ出来る時が今生にある事を望んでおります。

封筒の裏に「昭和十八年十月二十八日 武者小路実篤」と書いてあった。この手紙は実篤の周作人に対する親しみに溢れ、平和を望む実篤の切望が滲み出ている。実際、「新しき村」を訪れて以来、周作人は白樺派の文人、芸術家（武者小路実篤、志賀直哉、里見弴、長与善郎、千家元麿、木村莊八、犬養健、梅原龍三郎）と親しく接した。

1943年、実篤は北京に行く画家・宮崎丈二に託して富岡鉄斎の扇子絵を周作人に届けさせた。周作人は「武者先生と私」の中で、「武者先生とは語れないこ

とがなく、しかも意気投合で、それは一種の愉快で、幸福でもある」<sup>21</sup>と語っている。1913年4月2日付の周作人日記にも「午後『世間知らず』を読む。『白樺』の中で武者小路の著作は、最も個性的で共鳴を覚える」<sup>22</sup>と記してあった。日記によると、相模屋から定期購読していた『白樺』の毎号が届けられ、『朝日新聞』や他の書籍も送られている。

周作人の後半生は毛沢東時代の政治に翻弄されたが、利他主義の精神は生涯において挫折したことがない。「真、愛、美」を求める実篤の心と通じ合うものでもあった。古代ギリシアの詩人から影響を受けた周作人の小品はユーモアに富み、広く愛読されている。その根底にあるのは、生活を凝視する風刺の眼であり、実篤の芸術とも相通ずる。二人の友情と交流は、時代の荒波を乗り越え、両国の文学史に刻まれていくだろう。

### 3. 1934年の日本再訪

周作人と日本との関係には、もう一つ注目すべき接点があった。1934年7月、周作人が妻子と共に来日した折、中国文学研究会は歓迎会を主催している。『中国文学月報』第一号には、「周作人徐祖正両氏歓迎会：昭和九年八月四日、山水楼。与謝野寛、佐藤春夫、有島生馬、新居格、竹田複五氏との共同発起なり、出席者二十五名。」<sup>23</sup>と記されている。この歓迎会の出席者には、島崎藤村、戸川秋骨、塩谷温、堀口大學、松村梢風などがいた。島崎藤村は周作人と同行の徐祖正（北京大学教授）の二人を自宅に招き、和辻哲郎、有島生馬も同席した<sup>24</sup>。そのほかに、改造社、東方文化研究所、日華学会などと交流し、左翼系作家たちの会合に出席した。秋田雨雀と知り合ったのもその会合であった。『東京朝日新聞』、『読売新聞』も周作人の来日を数回報道した。

中国文学研究会（発起人：竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫、増田渉、松枝茂夫、松井武男、一戸務）は、これまでの日本における「漢学」（考証学）、「支那学」（宋学）を中心とした領域よりも、中国現代文学を含む中国の言語、文化といった広範囲を視野に入れている。一戸務（1904-1977）は塩谷温の門下生で、東京帝大在学中に福田清人、那須辰造等と共に第十次新思潮（1929-1930）を立ち上げている。その後、伊藤整の雑誌『文藝レビュー』に参加し、小説、評論、翻訳などを発表し

21 「武者先生与我」『天地』第3期、1943年12月、『周作人散文全集』第8巻所収。

22 魯迅博物館蔵『周作人日記』上、中国：大象出版社、1996年。

23 中国文学研究会編『中国文学月報』第1号、1935年2月。

24 周作人「島崎藤村先生」『芸文雑誌』1943年10月、『周作人散文全集』第8巻所収。

ている。また『三田文学』誌にも評論、随筆等を発表している。

東京帝大同期生の目加田誠とともに、1929年に北京の周作人私邸の門を叩いたことがある。周作人との初対面の印象について次のように語っている。「はじめて周作人先生の聲咳に接したのは、昭和四年己巳酷熱の候である。場所は先生の久住の地、北京西城八道湾の、折からむし暑い槐樹のもと蟬時雨のする閑雅な客庁であった。そとは焼けつくような暑さなのに、ややうすぐらい書斎のなかは、脚下に冷風さえ漂ってきて、海底にはいったようであった。頭髮を短くくりつと丸刈にされ、大きな球硝子<sup>たまがらす</sup>の眼鏡をかけて、麻織の真白い支那服を着衣されていた。初見の瞬間、わたくしは小説家山本有三氏の風貌を髣髴した」<sup>25</sup>とある。

後に一戸氏は周作人の散文集『苦茶随筆』を翻訳、出版した。周宛の書簡の1通目（昭和15年秋）の中で次のように述べている。

愈々秋深まりました。春以来先生の随筆翻譯の爲日々苦悩致しましたがやつと九月に書物になりました。国内は何かと多事にて文学も自づと功利的、現実的なものにおされ勝にて充分装幀なども昔日のおもかげのないものばかり刊行さるゝ現状となつてゐますので、先生の作品を所載しますには余りになさけない書物になつて恥入る次第です。翻訳も私の思ひ違ひで誤りの処も多からうと思ひます折に御批評願上ます。先生の御名前は日本で随分知れ渡つてゐます割合に先生の随筆に親しんでゐる者が少いやうです。翻訳が困難なために紹介が少いからかとも思ひます。作品中「窮袴」と「芳町」の十字ばかりが削除されました。これは私の注意が足りなかったので大変に礼を欠きました。

一戸務訳の『周作人 苦茶随筆』の扉に周作人の写真1枚と一戸務宛の書簡（4月1日付）の写真版がある。短札は、和訳への感謝、写真の送付、序文は恐縮で執筆が無理だ、という謙虚な内容である<sup>26</sup>。この翻訳は名取書店から刊行されて、松枝茂夫訳『瓜豆集』（創元社、1940年）と共に最初に和訳された周作人文集である。一戸務は「序」にこう書く。「私は周作人の随筆を翻訳しながら、今日の真の文文学者の姿はかくあるのではないかと信じた。陶淵明を愛する感情と諸葛孔明を慕う情熱と孔子を崇拝する智脳とが互に錯雑としてゐて、そのどの一つに走つても、現代の文文学者の域を飛びだすだらう。今日真の文人を求めて、私は

25 一戸務「周作人文学序説」、子息一戸渡氏より提供。

26 一戸務訳『周作人 苦茶随筆』名取書店、1940年。

周作人に深く尊敬を感じてゐる。」<sup>27</sup>とある。

一戸は1956年10月に日中文化交流協会主催の第1回目の日本作家訪中団（団長は青野季吉、以下は久保田万太郎、宇野浩二の諸氏11名）の一員として中国を訪問した。1929年からは27年ぶりの再開で感激した一戸氏は、周作人宛に下記の書簡（12月26日付）を送った。一部分を引用する。

（略）先生の御清祥なお姿に接し、心よりうれしく存じました。昭和四年七月に初めてお目にかゝりましてから三十年の月日が経ちます。中日戦争中は、わたくしは、しばしば日本軍閥から渡華をすすめられましたが、死ぬとも行かずと決意して今日に至り、あくまでも中日平和友好を心に祈っていましたが、その日が今日やって来てうれしくてたまりません。わたしは一個の貧しい中国学者であって、革命家ではないのですが、今日の新中国をみては、世界の理想国だと信じ、日に日に、りっぱになって行く中国を期してやみません。

帰国以来、多忙をかさね、かへつて御鄭重な御書翰に与り有難く思います。こんどの旅行では、西安がいちばん興味の中心でした。あんなに、たくさん唐代の発掘品がでてきたので、千年まへの唐の長安文化がはつきりとわかり、（略）日本文化は中国唐代の焼きうつしであるのを、立証する数々の学問的ヒントを得ました。（略）

先生の晩年の学問的な随筆を読みたくて、しかたありません。もつともつと御長寿でいられますことを、天の神々に契つてやみません。やがて人類にたのしい平和が来ると確信します。

周作人の散文から東洋の美と感性を感じた一戸氏は、北京を訪れたもう一つの目的として、晩年周作人の美文を読みたかったのだったが、それは実現できなかった。彼の尊敬した周作人先生は、既に散文を書く環境に恵まれず、公民権も剝奪され、生活と学問の自由が奪われた身となっていたのである。

1956年10月14日周作人日記に、「14日晴れ。午前、古魯の脚本玉虎墜を修正。〔方〕紀生は一戸君とともに来訪する。狂言選一冊を贈る。」と記されている（周作人親族提供）。

子息渡氏が提供してくださった一戸氏の「周作人文学序説」は、おそらく戦前

27 「序」、一戸務訳『周作人 苦茶随筆』4-5頁。



日本で周作人の散文芸術について書かれた最も詳細なものであろう。その中で、「周作人先生の著書を買ったのは、昭和四年に始まる。その後、わたくしは周作人先生の随筆から遠ざかった。昭和九年に雑誌「人間世」が刊行され、紙上に知堂の名を親しく見た。私は再び、先生の随筆に近づくようになった。(略)その間、先生からも書翰をいただいた。先生の筆蹟の鷗外のそれに躍如たるを感じたのである。」とし、「初期における周作人の文学的態度を、明治末期の鷗外と、やや似た文学風の如くに感じた」という感想を書いている。また「乱世は敢て今日支那ばかりではないが、こうした世に少しでも思想的に生き抜く文学者は、容易な姿ではあるまい。周作人は自ら中庸の道を生き抜くのだといいながらも、中庸に生き延び難い苦悩の相が筆端に浮んでいる。(略)周作人は北京を慕って去らず、今日なお北京西城に居を移さずにいる。その麗わしい姿は、私達日本人にとって一入心強く、支那文学の芽もここから再び咲き匂<sup>ひとしお</sup>って来るのではないかと思われる。」と語っている。ちなみに、一戸は鷗外の蔵書を整理し、東京大学図書館「鷗外文庫」の完成に携わったことがある。

一戸務は中国文化の理解に心血を注ぎ、明治以降に現れた中国蔑視の風潮をも批判した。1934年の周作人の訪日の際に書いた書簡(8月1日付)では、周作人に原稿依頼をしている。

今般、「近代支那文化研究」の叢書が私の編輯にて発刊いたすことになりました。日本では、近代及び現代の支那文化の研究書はこれが始めてなので、相当困難と冒険をおかして刊行することになりました。この点には日本の学者で研究してゐる方が少いので、実に選びに選んで、日本に於けるこの方面の第一流の学者芸術家、評論家の起筆を乞ふて完成いたしました。出版は九月二十日でございますが、これにつき一冊なりとも日本人に読ませ真実の支那の文化のすぐれた所をしらせたく存じます。日本人が近代支那文化に理解のないことは甚だしいもので、このために日支が相反して来るのは残念の至りだと思つてゐます。(略)この叢書を一般日本人に読んでみただけのやうに、先生の御推薦文をいただければ有難く存じます。

一戸務は著書『現代支那の文化と芸術』所収の「北京点々」で、中国の文芸について「北平は今でもこの物売り屋が、街の音楽である。さらでだに、支那人は音楽趣味豊かな人種であるが、その平和愛好性は、音楽趣味で養はれた点が少くない。自衛本能の最も強く発達せねばならぬ内乱、暴動、対外事件など四圍の情

勢のうづまき中に生活してゐて、惨忍性に富んだ国民性があると共に、平和な穏やかな一面もある」<sup>28</sup>と語り、鋭敏な感覚と、複眼的な視線で中国文化を観察している。同書所収の「魯迅随想」は、1930年代の魯迅を中国一流の「小説家」とする日本の評論の風潮に同調せず、「いつてみれば、野に下つた学者が小説を書いてゐるといつた風であつて、小説の分野からみれば、魯迅の小説は小説の形もなさぬ小説であるとも云ひきりたい」とし、「どの小説も、現代の中国の制度風習の上に立つたテーマ小説である。国境を超えて、人間の真に訴へるのではなく、当時の世俗を皮肉つたり、政治を揶揄したりするのが多く（略）小説らしい小説は魯迅の作品には一つもない。魯迅は小説家としては小説の域を飛び出してゐる思想家の小説家である」と論じる<sup>29</sup>。確かに、魯迅の『魯迅訳文全集』（全8巻）<sup>30</sup>の大半は、ソビエト時代の文学理論、革命小説『壊滅』（ア・ファージェエフ著）など、日本のプロレタリア文学理論（蔵原惟人の理論書）で占められるほか、厨川白村の文芸理論の翻訳もある。

一方、『周作人訳文全集』（全11巻）<sup>31</sup>では、ギリシア神話・古典（ルキアノス対話集、エウリピデス悲劇など）、日本の古典文学、近代文学、ロシア、東欧の民話、ハヴァロック・エリス性心理学の翻訳がほとんどである。文学理論の翻訳は一つもない。その多彩な内容から見れば、おそらく近代中国で『周作人訳文全集』は最も豊富なものだと思われる。中国では周兄弟の性格上の違いに着目して二人を論じる書物があるが<sup>32</sup>、彼らの翻訳を比較するものはあまり見当たらない。二人の翻訳したものは全く異なる分野であり、世界の文明と思想に対する二人の関心の違いを示している。

一戸務は、魯迅の小説は「真」の人間性への追求が欠如していると見ている。その考えは、竹内好の魯迅論と全く違う。「永遠の革命者」<sup>33</sup>と見做した竹内の魯迅像には、竹内の「近代の超克」という考えが投射されただろう。ただ竹内にしても魯迅の小説をあまり評価していない。竹内好研究者の孫歌は、竹内の『魯迅』を、「魯迅研究の基礎を築いた記念碑的著作」として、「全世界の魯迅研究者の必読書」と評価している<sup>34</sup>。中国では無数の魯迅像が登場したが、それらの魯迅像

28 一戸務『現代支那の文化と芸術』松山房、1939年、13-14頁。

29 同上、133-136頁。

30 北京魯迅博物館編『魯迅訳文全集』全8巻、福建教育出版社、2008年。

31 止庵編訂『周作人訳文全集』全11巻、上海人民出版社、2002年。

32 孫郁『魯迅と周作人』遼寧人民出版社、2007年；黃喬生『八道湾十一号』三聯書店、2014年。

33 竹内好『魯迅』未來社、1961年。

34 孫歌『竹内好という問い』岩波書店、2005年、30頁。

が時代の中で揺らぐのも実情である。

一戸務の魯迅論は、単なる小説の思想性に着目するのではなく、小説の言葉と世界との関係に深い洞察力を働かせている。鷗外文学に精通した一戸は、どこか鷗外の諦観に通ずるところがある。一般の魯迅研究者は一戸の魯迅論評をほとんど知らないようである<sup>35</sup>。ちなみに、一戸は学生時代に塩谷温の魯迅『中国小説史略』の講義を受け、7、8人の受講生と共にその翻訳に着手し、出版書店も決まったが、実現できなかった。

日本の中国学が中国に与えた影響は計り知れない。『支那学』と『中国文学月報』が日中文化の相互理解と学術交流に残した功績は大きかった。中国文学の研究者たちは、ほとんどみんな周作人と書簡交流を行っていた。その交流の全貌の解明は今後期待される。

#### 4. 谷崎潤一郎との交流

1960年代の周作人は、文芸評論家・曹聚仁（香港在住）との交友関係で、香港商人鮑耀明との手紙のやりとりが頻繁で、1960年3月から1966年5月21日まで鮑耀明宛に402通の書簡を送っており、晩年の周作人の一面を如実に物語る。その間、武者小路実篤、谷崎潤一郎、長與善郎らの周作人宛の書簡も鮑氏経由で届けられている。鮑はそれらの書簡をまとめて、香港で『周作人晩年書信』（私家版、1997年）を刊行し、後に中国国内で『周作人与鮑耀明通信集』という題名で出版した<sup>36</sup>。

この通信集を読むと、背筋が凍る思いがする。1960年7月31日の日記に、「一生を振り返ってみると、侮辱や被害を受けるばかりで、人の為に犠牲を払い続けることは、恐らく死に至るまでだろう」<sup>37</sup>と周作人は記している。1950年代以降の周作人の境遇は、悲惨そのものであった。日本の侵略戦争への協力という罪で、公民権を剥奪され、生計の道が断たれ、翻訳代で生活を維持するほかはなかった。1960年代には病氣治療のために愛蔵した日記の一部分を手放さなければならな

35 例えば、張夢陽『魯迅学：在中国、在東亞』広東教育出版社、2007年の「“竹内魯迅”与“中国魯迅”」の一章は竹内好の魯迅論に触れたが、一戸務の魯迅論については言及していない。

36 出版元の河南大学出版社は遺族の同意を得ないまま、周作人日記、書簡を出版し、作品の使用権および報酬などの権利を侵害した、という「違法」の判決が2005年11月北京市海淀区人民法院から出された。この判決は、出版元に対して、『鮑耀明与周作人通信集』の出版停止を命令した。2006年6月21日の『光明日報』第二面の「啓事」覧に、原告側の勝訴と被告側の賠償金が掲載された。この『鮑耀明与周作人通信集』は、孫郁・黄喬生編『回望周作人』（全9冊、河南大学出版社、2004年）の1冊とされる。

37 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』5頁。

かった。食品や栄養品を得られないで苦しんだ周作人は、鮑耀明との通信でほぼ毎回食品に触れている。谷崎も日本の食品、お菓子などを周作人に送り届けている。

鮑からの手紙（1961年10月31日）は、谷崎の手紙を引用している。「梅びしほ、周先生のお気に召しますれば、何回でもお届けします由、乞御返事」とある。『瘋癲老人日記』刊行後、谷崎は鮑宛てに、「誰かそちらの適当な篆刻家に『瘋癲老人日記』の二字を白文で彫って戴きたいものですが、よろしくお願い致します。印材もそちらの方が適当なものがあると思いますので、そちらで選んで下されば結構です。印材並びに篆刻家への謝礼等は、どうぞ御遠慮なく御申出戴きたいと存じます」<sup>38</sup>と書いたことがある。鮑からの依頼を受けて、周作人は、印刻家に「瘋癲」と「風癩」という二つの銅石印章を彫ってもらった。後に谷崎から『瘋癲老人日記』、『台所太平記』を周作人に贈呈した。ちなみに、現在、芦屋の谷崎潤一郎記念館には、谷崎が周作人に贈ったその『台所太平記』（初版）と書（小型掛け軸）がある。この2点は、岐阜県在住の柳玖美氏が、2014年秋ごろにご主人の遺品整理の時に見つけて、記念館に寄付したものである。その本と書は、周豊一氏（周作人の長男）が柳氏の夫である翁祖雄氏に預けたものである。当時、翁氏は北京大学で日本語を教え、柳氏も周氏と一緒に20年間近く北京図書館に勤務したことがある。二人は1978年に日本へ帰国している<sup>39</sup>。

戦後の周作人と谷崎潤一郎との交流の始まりは、1960年前後だろうと推察できる。1958年から、谷崎は病気で右手が不自由になり、筆を持つことができなくなったので、周作人宛ての書簡はすべて代筆による。年は明記していないが、2月5日付の書簡を一部引用する。

戦争中お目にかゝりましてからもう長いこと御無沙汰しておりますが、先日計らずも香港の鮑耀明さんを経て七言詩の御揮毫を戴き大変お懐かしく存じました。

もう十六、七年も前、京都祇園の「大友」といふ家でお目にかゝつたのが最後だと存じております。（略）あの時分は日本はもっとも不愉快であった時

38 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』171頁。

39 この経緯は、柳氏が直接筆者に知らせてくれた。在日華僑と結婚した柳玖美さんは、新中国建設のために1950年代初期に夫婦二人で北京に渡ったが、1978年に日本に戻った。柳氏は翁氏が周氏からもらった3冊の雑誌『颶風』（第14、15、16号、1982年7月、1983年3月、11月）と周作人の母親の写真4枚を筆者に送ってくださった。

代で、貴下様方もさぞ不愉快な記憶を持って御帰国になりましたこととお察し申します。お国にお帰りになりましてからも戦中から戦後にかけて、少なぬ御心労を嘗められたことと拝察致します。(略) 御健在の御様子でこんなよろこばしいことはありません。今はどう云ふお仕事をしておいでですか。(略) 戦後の貴国の御様子を見に参りたいと云ふ気持は今でも持ってをります。貴下様方も、さうなりましたら是非もう一度日本へお越し下さるやう、そしてあゝ云ふ不愉快な空気ではなく、平和な空気の中で再会のよろこびを得たいと思っております。

どうかくれぐれも御体を御大切になさいますやう御健康を祈つてをります。何か日本のもので、書物その他必要なお品がございましたら御遠慮なく御申し越し下さいませ。

実際、その後、谷崎から本や食品が何回も周作人に送られてきた。また、鮑の手紙(1961年3月27日)は、「本日谷崎潤一郎様から壺井栄童話集、坪田譲童話集、濱田広介童話集、夕鶴、彦平ばなし、赤い鳥が、合わせて五冊届いた。後日郵送する。」<sup>40</sup>と伝えてきている。これらの本はすべて周作人が購入を依頼したものである。ちなみに谷崎の代筆書簡以外に、松子夫人代書で谷崎署名の書簡(周作人の妻の死去への弔問)1通、松子夫人からの書簡(谷崎の死去の訃報)1通が、いま周作人の親族に保管されている。

谷崎の病気を気遣った周作人は、その死去の訃報に接し、鮑宛ての手紙(1965年8月7日)には「甚だ惜しいことだ。自分が明治時代の文学者の中で最も敬服しているのは、夏目漱石と森鷗外であり、大正時代以降の作家なら、谷崎君と永井荷風である。今はすべて故人となり、現代文学に関して読むことができないので知らない」<sup>41</sup>という哀切の念を記している。

周作人は鮑宛ての手紙に、日本文学において、「儒釈道に精通した」兼好法師から受けた影響がもっとも大きく、川柳集の『末摘花』からも影響を多く受けている」(1965年6月9日)<sup>42</sup>と書いたことがある。周作人も兼好同様に儒・釈・道に精通した人である。また、周作人の随筆「日本文化を談じるの書」(1936)、「日本文化を談じるの書 二」(1936)、「日本の再認識」(1942)などは彼の日本文化の教養を示している。谷崎は周作人について、「真に日本民族の長所を知つてゐ

40 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』39頁。

41 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』404頁。

42 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』395-396頁。

てくれる第一人者であると思ふ」<sup>43</sup>と評価している。

周作人は、日本軍占領期にも常に分別のある行動をしていた。中国人の文人として、巍然たる態度を以て臨んだ。決して中国の政治的イデオロギーに不当に扱われた「売国奴」ではなく、非常事態においても民族の正義感を放棄しなかったのである。

晩年の周作人は、1930年代から交流のあった中国文学者松枝茂夫、美術史家安藤更生とも書簡を交わし続けた。1953年9月の松枝茂夫からの周作人宛ての書簡には、彼が周作人に郵送した書籍（末摘花注釈2冊、アサヒグラフ、江戸好色本など）、周作人から送られた魯迅関係の本、革命小説『高玉宝』、胡風批判論集などに言及し、さらに、日本文学の翻訳について、「中国でどういうものが紹介され、又その翻訳が計画されているか大体のことをお教えねがいたく存じます。「訳文」にのった樋口一葉の二作の訳はまことに立派なもので感服にたえませんでした」、「日本文学の中国訳本をお送り下さる様おねがいます」という依頼も書いてあった。

周作人が受け取った日本知識人の手紙の中で、松枝茂夫からのものが最も多く、安藤更生からののは20通以上ある。周作人の生活、文学、また日本占領期の奉職を指す「偽職」も言及されている。松枝茂夫の手紙から、周作人が江戸文学、戦後日本の文化に深い関心を持っていたことがわかる。1950年代以降、周作人は魯迅、自分自身に関する回想、わずかな小品を書くにとどまった。主にギリシアの古典文学及び日本文学の翻訳に専念した。翻訳は人民文学出版社からの依頼で、原稿料は毎月の生活費として支給された（最初は月に200元、後に400元）。ただし、文芸評論の執筆は許されなかった。創作の環境に恵まれていなかった。

周作人の人生は、清王朝、民国時代、日中戦争、毛沢東時代、文化大革命などを経験してきた。どんな屈辱を受けても、彼の持ち前のヒューマニズムによって、学問と人生に失望したことはなかった。新文化運動に頭角を現した新鋭の文芸批評家、散文芸術家の零落は、現代中国の学術思想の挫折そのものだと考えられよう。

## 5. 周作人旧居の訪問

2008年夏、オリンピックが開催された北京の空は、格別に明るかった。その夏、北京ではじめて周作人の孫周吉宜氏一家とお会いした。その際、吉宜氏の母親（周

43 谷崎潤一郎「冷静と幽閑——周作人氏の印象」、方紀生編『周作人先生のこと』26頁。



作人の息子嫁）は、文化大革命の時に紅衛兵からリンチを受けた周作人の様子について涙ぐみながら語ってくれた。吉宜氏の三姉妹も挨拶してくれ、一番上の姉は、周作人旧居の北京新街口八道湾胡同十一号の地図を書いてくれた。

八道湾に近づいて、道端で老婦人に周作人のことを尋ねてみたら、「あの老人のことか、覚えているわ。普段はよく一人で何かを持って郵便局に行く様子を見かけた」と教えてくれた。旧居の前で、ある中年男性に出会い、周作人の様子を尋ねてみたが、彼は「周作人？ 知らないなあ」と頭を振ったが、しばらくすると、「もしかしてあの漢奸か、彼のことなら覚えているよ」と、文革の時のことを詳しく教えてくれた。「漢奸」とは、中国を裏切った人のことである。

「あの頃俺は小学生だったが、当時のことをよく覚えているよ。夏の日に紅衛兵がやってきて、あの漢奸を家から引きずり出して、大きな樹の下に立たせて、首にプラカードをかけさせた。そして、半分に割ったスイカを頭に被らせ、ベルトで殴ったりしたのさ。隣にその息子の嫁を立たせて、同じく半分に割ったスイカを頭に被らせた。そうだね、ひどい時は一日何回も引きずり出した。僕らは紅衛兵がこの庭にやってくる度に、みんなではしゃぎながら見に行った」と話した。この男の口から「漢奸、漢奸」が連発されることが気になった。

その男に旧居を案内してもらい、部屋を一つ一つ見て回った。その部屋はお手伝いさんが住んでいた東部屋で、周作人が病気に苦しみながら、亡くなったのもその部屋であった。

旧居の敷地は広がったが、今は雑居家屋に変身し、中に三十数軒の簡易家屋が建てられ、百人ほどがそこに住んでいる。高く聳え立つ数本の槐樹が強い夏の日差しのもとで大きな影を落している。この旧居に起きたことはすべてこれらの槐樹に刻まれていることと思う。周作人は1919年から1967年5月6日までそこに住んでいた。先の男がふと思わぬことを口にした。「知っているかい？ ここは間もなく取り壊されるんだ。全くひどい話だよ」

実は、北京市第三十五中学が八道湾近くに帰還することになり、新しい校舎を建てるために、周辺が取り壊されることになっている。八道湾胡同十一号もその範囲内だった。有識者や住民たちの反対で、辛うじて周作人旧居が新築の北京市第三十五中学の資料室に変身したという。広々としたモダンな第三十五中学校の敷地には、ゴルフ場や馬術部もあるそうだが、旧居の敷地にあった数本の大きな槐樹はどうなっているのだろう。

北京の八道湾胡同十一号は、1910年代から日中文化人の交流を結ぶところであった。戦前から周作人との交流のある日本の知識人は、北京を訪れば、みな

ここで周作人と面会したという。その「旧居」は今や消えてしまった。以下は、文革中の日記を抜粋する。

1966年7月31日：この一ヶ月は何もできなかった。しかも苦しみは甚だ、毎日苦しみ憂い、心が痛み、心地よい時は一刻もなく、畢生の中で最も苦しい境地だ。

1966年8月4日：劉満進が来て、運動が始まり、内外に書籍購入が中止され、本はごみ同様に売られると話す。

1966年8月23日（絶筆）：『毛沢東、文芸を論ずる』を読む。<sup>44</sup>

1967年5月6日、周作人は紅衛兵のベルトによる無数の傷痕を体に残したままこの世を去った。享年82歳。周作人は「知情合一」（知識と感情との融合）という学問観と人生観をもち、「中庸」思想を尊び、晩年、自分の信念を曲げず、芸術家としての良心を失うことはなかった。台湾の研究者・梁容若女史は、「知堂は聖賢に似ている人であり、トルストイ、ガンジーのような一流の人で、地獄に入り人を救うようなタイプである。ただ今の時代から遠ざかってしまい、彼を理解することは決して容易ではない」<sup>45</sup>と書いたことがある。

小文で取り上げた周作人と日本の知識人との往復書簡は、日中間の学術思想の交流を示す貴重な史料である。1915年に創刊された『新青年』は、新文化運動の原点であり、また新文学の始まりでもある。新文化運動の精神の一つは学問の独立と自由である。不幸な日中戦争のはざまに過酷な運命を体現した周作人の思想と行為を客観的に理解するには、彼の作品、日記だけではなく、日中往復書簡を参考にすることは重要である。これらの書簡を通して、周作人がいかに日中の相互理解に心血を注いだのかがわかり、ここから周作人の芸術、学問に対する正当な評価が得られることを期待している。

---

44 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』448-449頁。

45 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』3頁。